

志雲会東京第一回勉強会

テーマ：「古事記 大国主命の国譲り」 要約（その10）

松田 武

天照大御神と高御産巢日神は、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に天降り进行命じます。しかしながら、天忍穗耳命は葦原の中つ国には荒ぶる神々が居ることを知り、天降り进行躊躇します。そこで、高天原の神々は葦原の中つ国に棲む荒ぶる神々を、前もって帰順させようと、二度にわたり神を派遣致しました。しかし、一番手の神も二番手の神も共に使命を果たすことが出来ませんでした。

そこで、三番手として、勇ましい建御雷之男神（たけみかずちのをのかみ）を葦原の中つ国に派遣いたします。その際、副官に天鳥船神（あめのとりふねのかみ）を任命します。出雲に降った建御雷之男神は、自らの超能力をひけらかしながら、大国主神に国譲りを迫ります。

1 1. 天照大御神の天忍穗耳命へのご神勅

（3）建御雷之男神の派遣

建御雷之男神と天鳥船神の二柱の神は、出雲の国の伊那佐（いなさ）の小濱（おばま）に降って来られました。その浜で、大国主神に国譲りを迫る際、建御雷之男神は十掬の劔（とつかのつるぎ）を抜いて、逆さまに波頭に刺し立て、その劔の切っ先に胡坐をかいて、大国主神に問い質します。

① 八重事代主神（やえのことしろぬしのかみ）の対応

建御雷之男神の大国主神に発した言葉。まず、原典から始めます。

原典：天照大御神・高木神之命以問使之。汝之宇志波祁流葦原中國者、我御子之所知國、言依賜。故、汝心奈何。

読みは：天照大御神、高木神の命（みこと）もちて、問いに使はせり。汝（いまし）がうしはける葦原中國は、我が御子の知らす國ぞ、と言依さしたまいき。故（かれ）、汝の心は如何に。

筆者コメント：うしはく＝領地として治める。支配する。

知らす＝お治めになる。統治なさる。ご支配になる。

現代語訳としては、「大国主神が領有する葦原中國は、我が御子が統治する國である。」となるでしょう。しかし、“うしはく”と“知らす”の意味合いの違いは古語

辞典を漁っても、きっちりとは捉えがたい語彙である、という印象を持ちました。原典でも“宇志波祁流”と当時の口語表現に、いわゆる万葉仮名を当てはめております。

大国主神はその問いを受け、「私は答えられません。我が子の八重言代主神が答え出来るでしょう。しかし、今、八重言代主神は御大之前（みほのさき＝美保の埼）に鳥や魚を取りに出かけており、まだ帰って来ておりません。」とお答えになりました。

そこで、建御雷之男神は天鳥船神を遣わして、八重言代主神を連れて来させました。そして、建御雷之男神は八重言代主神に向かって「天照大御神と高天原の神々の仰せによって尋ねる。この中つ国を天照大御神の御子にお譲りするか。」と問いました。

その問いに対し、八重言代主神は、建御雷之男神にではなく、父である大国主神に向かって、「畏まりました。この国は天つ神の御子に差し上げましょう。」とおっしゃいました。（原典：問賜之時、語其父大神言。恐之。此國者、立奉天神之御子。）

しかしながら、八重言代主神は悔しかったのでしょう、自分の船をひっくり返し、天逆手（あめのさかて）を打って、船を青芝垣に変えて、その中に籠もってしまわれました。（原典：即蹈傾其船而、天逆手矣、於青柴垣打成而隠也。）

（注）“逆手を打つ”は呪術の一種。八重言代主神が青柴垣に籠もるとは、出雲の宗教的支配力を天照大御神の御子（皇室）に譲って、服従することを意味します。

②建御名方神（たけみなかたのかみ）の対応

八重言代主神が青芝垣に籠もった後、建御雷之男神は大国主神に対して、「汝の子、八重言代主神はこのように申された。他に物申す子はあるのか。」それに対し、大国主神は「私には建御名方神という子がおります。他にはおりません。」と答えられました。

このようなやり取りをしているところに、建御名方神が千引石（ちびきいわ＝大きな石）を軽々と手に持ってやって来まして、「誰だ、私の国にやって来て、こそこそと物を言っているのは。（原典：誰來我國而、忍忍如此物言） 先ずは力比べをやってみようではないか。それでは私が其方の手を取るぞ。」（原典：然欲爲力競。故、我先欲取其御手。）

（筆者注：両者お名前が似ているので、話が錯綜しそうですが、お名前に“雷”が付くのが天照大御神派遣の使者、お名前に“名”が付くのが大国主神の御子だとして区別して下さい。）

建御雷之男神は自分の腕を建御名方神に掴ませると、直ちに腕を氷柱に変えました。ひるむ建御名方神に対して、建御雷之男神はその腕を劔の刃に変えたため、建御名方神は恐れをなして引き下がりました。（原典：故令取其御手者、即取成立氷、亦取成劔刃、故爾懼而退居。）

建御雷之男神は次に建御名方神の腕を取り、その腕をまるで若い葦を掴むように握りつぶし、建御名方神を投げつけました。

建御名方神は、これは適わぬと、逃げ出しました。それを建御雷之男神は追っかけます。建御名方神は恐ろしくて、遠く信濃の国の諏訪湖の畔まで逃げて行きました。（原典：科野國之州羽海＝しなのこくのすわのうみ）

建御雷之男神は建御名方神を信濃の国まで追っかけてきて、建御名方神を殺そうとします。

その時、建御名方神は「恐れ入りました。どうぞ私を殺さないでください。私はこの地（諏訪）を離れてどこにも行きません。私の父の大国主神の言葉にも逆らいません。八重事代主神の言葉にも逆らいません。この葦原の中つ国は、天津神の御子の命に従い、すべて献上致します。」と建御名方神は建御雷之男神に降伏いたします。

（原典：恐、莫殺我。除此地者、不行他處。亦不違我父大國主神之命。不違八重事代主神之言。此葦原中國者、隨天神御子之命獻。）

③ 大国主神の対応

建御名方神を降伏させ、建御雷之男神は出雲に帰って参られました。

そこで再び大国主神に向かって、「あなたの子供たち、事代主神と建御名方神の二柱の神ともに、天津神の御子の仰せに従って背きません、と言っているが、あなたの考えはどうか」とお尋ねになりました。（原典：汝子等、事代主神・建御名方神二神者、隨天神御子之命、勿違白訖。故、汝心奈何。）

それに対して、大国主神は「我が子の二柱の神が申す通り、私も背きません。この葦原の中つ国は仰せの通り、献上致します。」とお答えになりました。（原典：僕子等二神隨白、僕之不違。此葦原中國者、隨命既獻也。）

大国主神はさらに続けます。「ただ、私の住むところを、天津神の御子が日嗣ぎされる立派な宮殿のように、地底の盤石に宮柱を太く立て、天に届くほど千木を高々と聳えさせる神殿を建てて下さったならば、遠い幽界に隠退致します。」とおっしゃいました。（原典：僕者於百不足八十垵手隱而侍＝あは、ももたらず、やそくまでにかくりてさぶろうなむ。）

(注) 八十垺手 (やそくまで) =多くの曲がりこんだ所を経て行く片隅の国、つまり幽界のこと

そして、「私の子供の百八十神 (ももやそがみ) は、八重事代主神が時には前に立ち、時には後に立って彼らを導きますので、誰一人背くものはありません。」と告げられました。

筆者コメント：ここで、大国主神の子は180神いらっしやった、と言うことが分かります。日本書紀では181神だったとしております。おそらく、各地域の有力者の姫君と契りを結ばれたものと考えられます。各地の数多くの姫君と結ばれたことが、大国主神が縁結びの神として尊ばれる所以でもあります。

この後、出雲国の多藝志之小濱 (たぎしのおばま) に天之御舍 (あめのみあらか) が造営され、建御雷之男神たいへんな御馳走により饗応されます。

その後、建御雷之男神は高天原に戻って、葦原の中つ国を平定した様子を天の神々に報告されました。(原典：故、建御雷神、返參上、復奏言向和平葦原中國之狀)

12. 天照大御神の番能邇邇藝命 (ほののにぎのみこと) へのご神勅

建御雷之男神の働きにより、葦原の中つ国が平定されました。

そこで、天照大御神と高木神は改めて、太子 (ひつぎみこ) である正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に対して「今、葦原の中つ国は平定されたと報告あった。先に命じた通り、あなたは天降って、その国を治めなさい」と仰せになりました。(原典：今平訖葦原中國之白。故、隨言依賜降坐而知者。)

それに対し、太子の正勝吾勝勝速日天忍穗耳命は次のようにお答えになりました。「私が天降ろうと準備している間に子供が生まれました。名前を天邇岐志國邇岐天津日高日子番能邇邇藝命 (あめにきしくに、にきし、あまつひこひこ、ほののにぎのみこと) (句点は筆者) と言います。この子を中つ国に天降らすのがよろしいかと存じます。」(原典：僕者將降裝束之間、子生出、名天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命。此子應降也。)

この御子、番能邇邇藝命は、天忍穗耳命が高木神の娘、萬幡豐秋津師比賣命 (よろづはた、あきづしひめのみこと) と結婚されて生んだ神のお一柱であります。天火明命 (あめのほあかりのみこと) の弟君であります。

(天照大御神は何故か天忍穗耳命の申し出をすんなり受け入れ) 番能邇邇藝命に対して天降りの詔 (みことのり) を発せられ、天降りを命じられます。そのご神勅は次の通りであります。

ひこほのににぎのみことに みことおほせて このとよあしはらのみずほのくには いまししらさんくになりと ことよさしたまふ

日子番能邇邇藝命に詔科せて、此の豊葦原の水穂國は、汝知らさん國なりと、言依さし賜う。

かれ みことのまにまに あもるべし とのりたまいき

故、命の随天降る可しとのりたまいき。

（原典：科詔日子番能邇邇藝命此豊葦原水穂國者、汝將知國、言依賜。故、隨命以可天降。）

日子番能邇邇藝命は天降りされる際、数多くの補佐の神々が与えられると共に、あの天照大御神を天の岩屋戸から外にお招きした時に使われた「八尺勾璫（やさかのまがたま）」と「鏡」そして速須佐男命から献上された「草那藝劔（くさなぎのつるぎ）」を与えられました。これは言うまでもなく、これらは三種の神器であります。



やたのかがみ
八咫鏡



くさなぎのつるぎ
草薙劔



やさかにのまがたま
八咫瓊勾玉

かくのごとく、大国主神の国譲りは建御雷之男神の働きにより無事に行われ、天照大御神の詔（みことのり）により日子番能邇邇藝命は天降りされました。

（続く）

1. 天壤無窮の神勅

日本書紀における天照大御神の日子番能邇邇藝命に対するご神勅は以下の通りであります。

よりてすめみまにみことのりしてのたまわく とよあしはらちいほあきのみずほのくには これあがうみのこの

因りて皇孫に詔して曰く、豊葦原千五百秋之水穂國は、是れ吾が子孫の

きみたるべきくになり

王たる可き地なり。

よろしく いましすめみま ゆきてしるせ さきくませ あまのひつぎのさかえまさんこと まさにあめつちときわまりなかるべし

宜しく爾皇孫就きて治せ。 行矣 、寶祚の隆えまさんこと、當に天壤と窮無かるべし。

（原文：葦原千五百秋之瑞穂國、是吾子孫可王之地也。宜爾皇孫、就而治焉。行矣。寶祚之降、當與天壤無窮者矣。）

このご神勅は「天壤無窮の神勅」として知られております。

2. 出雲の国の伊那佐（いなさ）の小濱（おばま）

この浜辺は建御雷之男神が大国主神に対して国譲りを迫ったところで、現在は「稲佐の浜」と呼ばれ、出雲大社の西の方、至近距離に位置する浜辺であります。「いなさ」とは言い得て妙であります。即ち、別の漢字に置き換えますと「否、然」となります。つまり「イエスカノーか」ということです。これは、山下奉文

（やました ともゆき）陸軍大將が、シンガポールの戦いの終結時に敵將イギリス軍司令官のアーサー・パーシバル陸軍中將に対して「イエスカノーか」と降伏を迫ったという逸話を思い出させるネーミングだと思います。

3. 大国主神が要求した神殿

建御雷之男神との国譲りの交渉において、大国主神が出した条件は「私の住まいは、天津神のお住まいになるような壮大なる宮殿に、地底の岩盤に宮柱を太く立て、高天原に届くほどに千木が高く聳える神殿を建てて下さるのならば、自分は幽界に身を引きましょう」と言うものでした。

伝承によりますと、かつてご本殿の高さは16丈（約48メートル）もあったと言われております。平成12年、出雲大社の八足門の手前三か所から、巨大な三本の柱が発見されました。これは3本の柱を鉄製の金輪でくくり、直径3メートルの太い柱にしたものでした。古代の壮大なご本殿の姿が想像される発見でした。

現在の出雲大社は60年に一度の、平成の大遷宮により平成25年3月にご修造が完了し、本殿の高さは24メートルとなっております。仮殿遷座祭が平成20年4月20日に行われ、約5年を経て、本殿遷座祭は平成25年5月10日に執り行われました。



出雲大社

4. 国譲りの根拠

国譲りの条件は大きな神殿を建てること、それは実施されたようですが、大国主神の国譲りが何故かくもすんなりで行われたのか。あるいは行われたことになっているのか。次稿では古事記作者の視点で国譲りの根拠を探ってみたいと思います。